



けが  
穢  
れ  
な  
い  
つ  
み  
罪

北川とも

TOMO KITAGAWA • PRESENTS

高緒拾

HIROI TAKAO • ILLUSTRATION



「んあつ、あつ、激し……、首藤、すごい——」「あなたを、壊すかもしれませんね。わたしの、貪欲さは」廉はしどけなく笑いかけ、必死に首藤の首にすがりつく。「い、から。首藤になら、壊されたっていつ……」廉、と名を呼ばれて、首藤が達する。



穢れない罪

《立読み版》

北川 とも

イラスト 高緒 拾

静謐な雰囲気の中、厳かに聖歌が流れる。白いユリの花を手にした献花の人の列は、まだ当分続きそうだ。この告別式での参列者の多さは、カトリック信者であった故人の人柄のよさと交友関係の広さ、それに社会的地位の高さを物語っているといえるだろう。

身じろぎもせず親族席の木製ベンチに腰掛けている葛井廉は、ずっと握っていたハンカチを額に押し当てる。少し気分が悪い。この大聖堂に満ちる熱気に当てられたのかもしれない。

廉は祭壇へと視線を向ける。その中央に、豪華な花で飾りたてられた棺がある。中で眠るのは、廉の伯父である葛井清吾だ。もつとも、十年前、十八歳で父親を亡くした廉にとっては、清吾はもう一人の父親と表現しても差し支えないだろう。

ハンカチを額に当てたままため息を洩らす。突然、肩を叩かれた。顔を上げると、兄の聖に見つめられていた。普段は冷ややかな印象しか与えない目は、今は廉を氣遣う色を浮かべている。

「——気分が悪いのか？」

「みたいだ……」

廉の言葉に聖は唇に皮肉っぽい笑みを浮かべ、小声で応じた。

「これぐらいで参ってどうする。大変なのはこれからだぞ」

聖は、清吾の死に廉ほど堪えている様子はなかった。四つ歳の離れた聖とは、伯父の死に対する受け止め方が違っても無理はないのかもしれない。

清吾は家庭に縁の薄い人間だった。妻とはずいぶん前に離婚し、子供もいない。父親は存命だが、入院中だ。弟——つまり廉と聖の父親もすでにおらず、一番身近な親族が廉と聖ということになる。

廉は横目でそつと聖をうかがう。実の兄ながら、クールがスーツを着ているような人間だと思う。

非の打ち所のない整った容貌の持ち主だが、聖を語るうえで欠かせないのはむしろ、その冷えた眼差しだろう。冷徹で切れ者然とした印象があり、内面はその印象を確実に裏付けている。

こんな兄でも、心の中では清吾の死を少しは悲しんでいるのだろうかと思いを巡らせる。

ぼんやりとしかけていた廉の耳に、後ろの席についている親戚たちが密やかに交わす会話が飛び込んできた。

「……若いなあ。まだ六十二だっというのに、こうもあっさり逝くなんて」

「入院して一週間で容態が急変するなんて思いもしませんでしたよ」

廉はそつと唇を噛む。清吾は、廉にも病氣のことを入院するまで教えてくれなかったのだ。末期ガンで転移もしていると聞かされたとき、廉はその場に崩れ込んでしばらく動けなかった。

「こうなると、厄介な問題は残された連中で勝手にしろってことだろうな」

抑えた笑い声が上がる。その笑い声には、押し殺せない喜びが交じっていた。

「——厄介な問題とは、財産のことですか？」

「ああ。清吾くんの私財はかなりのもんだ。……我々も恩恵に与かる権利はある。なんといつても、彼には妻子がいなかったからな。父親が財産放棄をした今、親戚で平等に分けるべきだ」

聞いていて胸が悪くなってくる。日ごろつき合いのなかった親戚たちの思惑など看破しているつもりだったが、こうもあからさまに口に出されると、この場から出て行けと怒鳴りたくなる。

込み上げた激情を押し殺す廉の隣で、聖が冷笑交じりに言った。

「幸せな連中だな。今になって尻尾を振って、餌をもらえるつもりでいるなんて」

聖の言葉が聞こえたらしく、後ろの会話が不自然に途切れる。

重苦しく息を吐き出し、無意識に黒のネクタイを緩めそうになる。それが許される場でないことを思い出し、廉は聖にそっと耳打ちした。

「少し外の空気を吸ってくる。それと——煙草あるかな」

「お前、持ってきてないのか？ おれのはきついぞ」

「持ってきてるけど、きついほうがいいんだ」

一瞬もの言いたげな表情を浮かべた聖だが、すぐにシガーケースを手渡してくれた。廉はそれをジャケットのポケットに滑り込ませて席を立ち、献花を終えた人たちに紛れるように大聖堂を出る。

予想はしていたが、ホールには人が多かった。大聖堂である程度の節度を保っていたものが、ホールで歯止めをなくしたようにざわつき、どこか殺伐とした空気が漂っていた。マスコミの人間も何人か紛れ込んでいるようだ。

とにかく今煙草が吸いたい廉は、ホール横にある洗面所は混雑していたので諦め、通りかかった神父に他の洗面所の場所を尋ねる。教えてもらったのは、聖堂会館の隣にある信徒会館というもう一つの棟だ。

大聖堂だけでも大きかったが、こんな会館まであるということは、教会としての規模そのものが大きいのだろう。どの建物も豪華というわけではないが立派だ。

よく磨かれた廊下を歩きながら、清吾もよく寄付をしていたのだろうと考えた廉は、次の瞬間には苦々しいものを感じ、眉をひそめた。なんでも金に換算したがるのは、後ろのベンチに座っていた親戚連中と大差はない。いよいよ考え方が毒されてきたのかもしれない。

洗面所に人の姿がないのに安心して、廉は五つ並ぶ個室の一番奥に入る。壁にもたれかかると、ようやくシガーケースとライターを取り出すことができた。

煙草を咥えて火をつける。煙を吸い込んだ次の瞬間、軽く咳き込む。

「……本当に、きついな……」

それでもこのフレーバーのきつさは、今の廉にはちょうどいい。

ふと、清吾は廉が煙草を吸うのにいい顔をしていなかったのを思い出した。それでいて、聖が吸うことに関しては無関心だった。誰もが認めているが、廉は清吾に可愛がられ、大事にされた。まるで実の息子のように。

注がれていた大事な愛情を失ったのだと、改めて胸に悲しさが迫る。目が熱くなってきたので、慌てて深く煙を吸い込む。

このとき、洗面所の扉が開閉された大きな音に続いて、二人分の足音が聞こえた。

「はあーっ、たまんね。社長の告別式のときぐらい、いがみ合うのは止めてほしいよな」

派手な嘆き声の主は、どうやら廉と同年齢ぐらいで、応じた相手も同じようだ。

「言うだけムダだろ。うちの会社の内紛は、今じゃ週刊誌で取り上げられてるぐらいだからな」



「人心掌握の鑑かがみみたいな社長が、社内をなんとか治めていたからな。そのせいで、社内改革を目指すやり手の専務派も行動が起こせなかった」

正解、と廉は煙草を指に挟み、声を出さずに唇を動かす。

ちなみに彼らが話題にしている会社の名は葛井製菓で、社長の名は葛井清吾くすいせいやくという。ちなみに会長は清吾の父親で、廉にとっては祖父にあたる。

廉はその葛井製菓に勤め、管理本部秘書部主任という肩書きを持つ。聖も同じ会社で、管理本部広報部部长を務めている。どちらも役職は、人からなんといわれようが実力で手に入れたものだ。

廉は携帯灰皿を取り出し、灰を落とす。その間も、個室の外で話す二人の社員はぼやき続け、会話に水音が交じる。続いて再びドアが開閉される音がして、洗面所に静寂が戻った。

天井を仰ぎ見た廉は、煙草の煙ごと大きく息を吐き出す。さきほどの二人の会話は、否応なく、これから先、廉を待ち受ける現実を眼前に突きつけてきた。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

穢れない罪

《立読み版》

発行日 2012年2月10日

著者名 北川 とも

イラスト 高緒 拾

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Tomo Kitagawa 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。